

Gloom under the cherry blossom

陽ノ下光一

【第二章】

「ヤバイ……ヤベエんだよ」

オレは頭を両手で抱え込んだ。テーブルの向かいに座る友人は頷きながら麦茶を口に運ぶ。

友人——清水亮二はいつものように突然現れ、そして人の家の飯を何食わぬ顔で食べていた。

オレはその清水に小一時間程の間、頭を抱えながら向かい合っていた。

「バイト先で釣りを間違える。大学では教室を間違えたし、砂糖と塩を間違えるは……」

「さつきから間違いの連続ばかり言ってるね」

清水はさわやかな容姿に似合う、さわやかな声でにこやかに言った。

「なんか頭は熱いし、胸はバクバク言うしよ」

「ハハ、夏だしね」

「サークルで部長に声掛けしようとしたら、ノド乾いて声がかすれるし」

「バカは風邪引かないって言うけど、一応診てもらった

方がいいよ」

「……」

「……」

「お前、今さわやかな顔してバカにしたろ？」

「いやだなあ尚也。ついには耳もイカレタのかい？」

「……」

今もバカにされた気がする。しかし、今は余り頭が働かない。報復措置は次回にしよう。

「清水。この気持ちは一体全体何なんだ？」

「さあね。あ、ご飯もう一杯もらうね」

清水、報復措置は今回にする。

ヤツが炊飯器に向き合ったため、今背後は無防備だ。

右手に広辞苑、左手に独和辞典を装着。秘技『悶絶転倒』発動。

「お、落ち着いて！ ボ、ボクを殺しても意味は」

殺気に気付いたか、清水は振り返るなり慌ててそう言った。オレの殺気はしかし増幅。

「尚也の悩みの原因をボクは知ってるんだ！」

衝撃の事実。オレは振り上げた手を一旦降ろした。

「ボクは兄貴同様、大学内にファンクラブがあつてね」

「キサマの自慢話に付き合う気はない」

オレは殺気をみなぎらせ、再び秘技の発動体勢に移行する。清水は両手を何度も振って、落ち着いてと必死のジェスチャーを送ってくる。

「だ、だから、それだけ女性絡みの事には強いということと言いたいんだ！」

「……抹殺決定、だな」

「あ、ああ、だ、だから、な、尚也の悩みは、そ、その、女性絡み。おそらく相手は話しからして」

ヤツの懇願に、オレは猶予を与えることにした。

「なんだ？ 続けてみな」

コクコクと首に上下運動をさせる清水。

「た、多分、尚也はその人に……の前に、その女性を尚也はどう思うわけ？」

「どうって……」

言われて返事に詰まる。

その隙に清水が少しずつ右にずれながら、逃げようとするのが見える。

「ひっ」

オレはその進路の床を思いっきり踏み鳴らして、その動きを抑えつつ、考える。

「美人だし、がさつだけど、楽しい人」

オレはそう呟く。

「それだけなら一般論だろ。もっと踏み込んでなにかないか？」

櫻さんのことを思い浮かべようとする。流れるような黒髪。いたずらっぽい笑み。闊達で、いるだけで周囲が明るくなる。

思い浮かべているうちに、自分の体温が上がるのを感じる。

最初に会った、あの桜の木の下。思わず見とれた時間。

周りに咲き誇る桜よりも、一層目を惹かれた。

「出会ったとき、周りのなによりも目を惹かれた。見とれてた」

「それだよ！」

清水は、我が意を得たとばかりに、手を叩き、

「わからないか？」

問いかけに、しかし、返事が出ない。のど元で張り付く。

その状況を清水は楽しんでいるようにも見えた。

「やっぱ、そうか。オレ、櫻さんのこと」

「はい、そこまで。これ以上のろけを聞かされたくないんでね」

そう言った清水の笑みは穏やかですらある。嫌味は感じられない。

「そういう気持ちなら、行動に移るんだな。こういうのは待っててもいい結果にはならないんだ」

オレは頷いた。

その後、清水は『この手はボクの専門分野だから』と、様々な助言をしてくれた。

「すまねえな」

オレが礼を言うと、清水は手を振って、

「気にするなよ。しかしなあ、どうして尚也はこんなに鈍いわけ？ 大体自分の気持ちだろ。中坊以下？ だから彼女できなかったんじゃないの今まで、というかな、そもそも尚也は、正直バカだ……」

清水は、調子に乗り出した。さらに延々とオレの悪口、さらには人格論まで述べた。

ヤツの饒舌ぶりを披露され、オレは制裁を再決定した。「だから、尚也はもう少しボクを見習うべきで……あ、な、何？ その二冊の辞典。ま、待って……ぼ、ボクは一般論を」

次の瞬間、悲鳴にならない悲鳴が上がった。

「いつも買い出し付き合ってもらって悪いわね」

櫻さんは、隣で歩を進めるオレの顔を覗き込んでそう言った。

「別に構いませんよ。アパート同じですし」

「バイトも同じで、サークルも同じで、誕生日まで同じだけどね」

櫻さんはそう言葉を続けた。

そう、櫻さんとオレは同じものが多いのだ。余りに出来過ぎていてマンガや小説の世界みたいだ。

バイトと住んでいるアパートが同じだから、バイト帰りに食料の買い出しに付き合うこともよくある。

というか、清水の『一緒に行動したほうが仲は進展するのさ』との助言もあり、一緒にいられる時間を長くしようとしたためでもあるのだが。

最初からそういう考えで一緒にいると、後ろめたい気もする。

オレの部屋は三〇七号、櫻さんは二〇七号。ちょうどオレの部屋の真下が櫻さんの部屋だ。

「じつかし暑いわね」

もう八月の半ばである。夜とはいえ三十度近い熱帯夜が連続している。

ふと櫻さんに視線を移した。白のシャツにインディゴブルーのジーンズというラフな出で立ちだ。薄着のため、モデル並みの恵まれたスタイル……特にその上の方の部分に目が行ってしまうのは我ながら情けない。

「じつかし本当に暑いなあ」

櫻さんはそう呟いて、手でシャツの胸元辺りを掴みパタパタと動かして風を送り始めた。

……げ、見えてる。

オレは百七十センチはある櫻さんよりも十センチ程背が高く、その豊かな胸を覆うブラが見えてしまっていた。

いや、正確に言うとは釘づけ状態。そんな自分がやっぱり情けない。

「だああああ！」

「ん？ どうしたの？」

突然頭を振って叫びだしたオレを、櫻さんが先程の動作を止め、不思議そうな表情で覗き込む。

「な、なんでもないです」

オレは慌ててそう言った。内心の動揺が思いつきり外に出ている気がする。心臓は激しく音を立ててるし、外気の暑さだけでなく、身体の内側からも暑くなっているのが分かる。

そんなオレの慌ててる様を見て、櫻さんはクスクス笑いだす。

「キミってヘンだよ」

「え？」

「だってさ……ま、今の行動もそうだけどね。それ以外にもね」

櫻さんは意味ありげに含み笑いをし、

「やっぱりヘンなのよ」

夏休みの間にも、我が文芸部は活動をしている。夏の間には秋の学園祭に向け、作品集を作るからだ。

オレは作品を書かないので、他の人の作品のチェックや編集作業に携わっている。

今日も暑い中、部室で上がってきた作品をチェックしていた。

「岸田さん」

「ん、何？」

「部長の作品って、バットエンドの悲恋物語ばかりですね」

「ああ、彼女は入部してきた時からずっと一貫してそうだよ」

今オレがチェックしている櫻さんの作品も悲恋物語だ。内気な女性と活発な女性、そして一人の青年の間の恋物語。最後は内気な女性が他の二人を刺殺してしまう。そんな物語。

「普段の彼女を見ると、そういう作品とは最も遠い位置にいるように思えるんだけどな。でも、いつもそういう作品しか書かないね」

岸田さんはチェックの済んでいない原稿をもう一つ手に取り、

「別の作品も書いたらと言ったら」

「言ったら？」

「ヤダよーだ……と言われた」

「……」

「理由聞いても、教えてやんないよと言われるし、それ以上の追求を許さない感じだったから、それ以後は聞いてないよ」

岸田さんは慣れた手つきで原稿に赤を入れながら、

「何かあったのかな？ 彼女」

岸田さんは何気なくそう言った。

「……」

しかしオレは気になった。大した理由もないのかも知れないが、何故櫻さんは悲恋物語を書くのか。

オレの手元にある櫻さんの作品は『紅染まる雪』。

「ごちそうさま」

そう言って、櫻さんは手拍子一つ。

オレと櫻さんは部屋が間近のこともあり、晩飯を一緒に食べることも多い。

最初は、清水の助言を受けたオレからの提案だったが、いつの間にか日常風景になっている気もする。

まだ暑い夏、今夜は冷し中華だ。

「キミも料理上手になってきたね」

櫻さんはそう言ってオレの料理をほめてくれるが、

「別に、スーパーで買ってきたのを説明通りに作るだけじゃないですか」

オレはいつものように応えるだけである。すると、

「人がほめたら素直に受けなよ」

そう言って櫻さんはむくれるのだ。褒め言葉に対してつまらない謙遜で返すな、とは彼女の言。

「部長。ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

「ん、何？」

オレは聞くべきか否か微かに躊躇して、そして数呼吸

分間を空かして聞いた。

「部長の作品……何で悲恋物語しかないんですか？」

その言葉に、今までの微笑が消えた。眉をひそめて、まるで警戒しているようにも見える。

「別に……いいじゃない。書くのは何でも自由なのが部のモットーだもん」

櫻さんにしては珍しく歯切れが悪い。たった一言で態度がこんなに変わるものかとオレは思った。

「でも、櫻さんには別のジャンルの方が合ってる気が」

「いいでしょう別に！」

オレは櫻さんが怒鳴ったのを初めて聞いた。そして理解もした。悲恋にこだわるのに、やはり何かあるんだと。

「もう帰る！」

櫻さんは立ち上り背を向けた。オレは咄嗟に立ち上がって、気付いたら櫻さんの左手を握り締め引き止めた。

「え？」

櫻さんは肩ごしにオレに微かな驚きの視線を向けると、再び玄関の方へ顔を向け、視線を床に落とす。背を向けているままだから、その表情がどうなっているかは分からない。

「手、離して」

「へ？ あ、ああ、すみません！」

オレは櫻さんの手を握り締めていたことをすっかり忘

れていた。言われて慌てて手を離す。

「……」

櫻さんは背を向けたまま黙っている。いつもの雰囲気からは考えられないことだ。

「聞いたら……私を避ける？」

「え？」

「……」

避ける……とはどういう意味だろう？ オレは首を捻った。

「避ける？」

再度問い掛けてきた言葉も真剣そのものだ。

「なんで避けるんですか？」

もっと気の利いた言い方はなかったかと、言ってから後悔した。

櫻さんは、再度肩ごしにこちらを窺い、また玄関の方を向いた。オレはその表情に驚きを隠せなかった。

半分涙目になり、唇を噛み締めて何かに耐えているようだったからだ。

オレは思った。櫻さんは本当はかなり繊細な女性なのではないかと、普段の明るさに隠れているこちらの方が、本当の櫻さんではないかと。

「私には、姉がいてね」

櫻さんは背を向けたまま話し始めた。

「がさつな私と違って、優しくて気は利いて、おしとやかな人だった」

オレは黙って聞いていた。下手に言葉を発したら、そこで全てが終わりそうに感じたから。

「姉はここに在学していたことがあってね」

そこで一呼吸分置き、

「文芸部に在籍していた。そして、姉の初恋の相手もね」

大学で初恋なんて珍しいわよね、そう続けると、
「でもね、その男性を別の人に取られたんだ……ま、内気で告白できなかった姉も悪いけどね」

「……」

「姉はその後……その女性と男性を……」

櫻さんの声に、啜り泣く声が混じってきた。

「殺したのよ」

オレは驚いたが、声は出さなかった。出したとして何を言えればいいというのか。

櫻さんが話をとぎれとぎれに続けたところによれば、事件は十一年も前の三月十五日、記録的な大雪の日だったらしい。

姉の静香さんは捕まったが、精神鑑定の結果、不起訴処分になった。それ以降、静香さんは部屋に籠もり、ほとんど廃人同然だった。

事件以降、周囲からは白い目で見られるようになり、母親はノイローゼ気味になり、家庭は荒れていった。

九年前、静香さんは自室で手首を切って自殺。それを見つけたのは櫻さんだった。

発見した櫻さんは、ショックから、しばらくの間失語症にかかっていた。

それをきっかけに両親は離婚。大学に入るまで、父の実家に引き取られた。

さすがに事件から十一年が経ち、この大学は以前住んでいた岩手からも離れている。事件は時とともに風化していく、記憶している人がいても櫻さんがその家族と分かるわけでもなく、櫻さんは努めて明るく振る舞うようになった。

元々は明るい性格だったが、今は過去の傷を隠すための仮面、と櫻さんは言う。

「悲恋ばかりを書くのは……姉のことを忘れきれないから。だって、余りにかわいそうで……」

事件のせいで周りからは冷たくされ、家庭が崩壊したというのに、姉に同情できるのだから、よほど姉が好きだったんだろうなと、内心思った。

「ハッピーエンドは書けないんだ。なんか、嘘っぽくてね。私も多分……ハッピーエンドにはならないと思うから。……未だに姉を引きずっているし」

「そんなことはありません！」

オレは気付けば大声を上げていた。

櫻さんが泣き腫らした目で、肩ごしにオレを見る。

その目は「なんで？」と訴えている気がした。

「櫻さんは櫻さんだからです」

その言葉に櫻さんは、肩ごしにこちらを見たまま、それぞれの手で二の腕を握り締め、身体を強ばらせた。

「オレが幸せにします！」

その言葉は自然に出た。

オレは、あの瞬間、あの桜の木の下で会った瞬間から、この人——皆瀬櫻に惚れていた。

だから、清水の助言だって受けた。いや、助言などなくても近くにいたい、そう思ったはずだ。

だから、この言葉に偽りはない。

櫻さんは、その言葉にゆっくりとこちらに振り向いた。

「ム、ムリだよ……幸せなんか」

櫻さんは身体を強ばらせたまま、首を横に振った。

「……」

「……」

オレは身体を縮めるように強ばらせている櫻さんを、両手で包むように抱き締めていた。オレに抱き締められた櫻さんがビクツと身体を震わせた。

「バカ」

「……」

櫻さんはオレのことを叩きながらさらに続けた。

「バカ、バカ……キミは正真正銘のバカだよ」

「……」

「ズルイよキミは……人の弱いところにつけこんで」

言つて、櫻さんは顔を上げた。オレの顔とかなりの至近距離。目は赤く、まだ涙の筋が見えたが、顔はいつものように笑みを浮かべていた。

オレは急に、心臓がバクバク悲鳴を上げているのが付いた。

冷静に考えると、オレは普段じゃ考えられないことをしていた気がする。まるでドラマか何かみたいだ。

でも、とつた行動は正しいと思う。

「裏切ったら許さないからね！」

部長は快活な笑みを浮かべつつ、そう言い、肘でオレの腹を力を込めて突いた。

「うおっ……」

オレはその不意打ちに対処できず、そのままふっ飛ばされ、仰向けに倒れた。

「ゴ、ゴメン！ 大丈夫？」

櫻さんが慌ててオレの側にしゃがんで、心配そうに見つめた。

カッコ悪い……と、内心思った。

「じゃ、これからよろしくね………尚也」

櫻さんはそう言つてニッコリ微笑んだ。